

金沢城下の広見の起源と配置について*

Beginning of "Hiromi" in Kanazawa Castle Town and Its Arrangement on Road Network Planning

馬場先恵子**

By Keiko BABASAKI

金沢に現代も多く残る広見について、形成時期の特徴や配置目的を分析・考察した。始めに、既存文献をもとに近世城下町の成立過程を調べ、城下町の防衛・防火を目的とした道路計画のひとつである橋詰、枡形、広小路が広見と同様のものと位置付けた。次に、金沢城下町がほぼ完成した時期を17世紀後期とみなし、その時期に最も近い絵図をもとに、広見の形態と配置の特徴を、主要道路や堀、川などとの位置関係から分析した。

1. はじめに

非戦災都市である金沢市旧市街地の基本的街路構造は、藩政期から継承されてきている。著者ら¹⁾は、藩末期(1830)の金沢城下の街路構造について、街路網、街路長、幅員、土地利用等の分析を行っているが、成立経緯やその後の変化等に関する分析は行っていない。都市における街路の成立過程やその使われ方の変遷等を理解することは、今後の整備計画にも重要なことと考えられる。

本研究では、特に「広見」に着目した。広見とは、街路の一部が広がっている部分をさす。現在も多数存在しているのは金沢の特徴といわれているが、その設置目的や、他の城下町における広見の有無などは調べられていない。ここでは、金沢城下町の形成時期における広見の特徴や配置目的について調査・分析する。

2. 既存文献の整理

(1) 広見について

「広見」に関する文献は少なく、そのほとんどが金沢に関するものである。島村²⁾は、広見の使われ方について、伏兵を配置するための戦略的計画や、荷車などの回転場所、火消しの結集地点、藩の高札や辻説法の場所などといわれているとしている。さらに、昭和初期にはコミュニティ・ゲートの役割、広場的役割を担っていたと考えている。また、佐藤³⁾は、近世城下町の特徴のひとつに、「広見、枡形、橋詰め広場、街路の屈曲」により都市空間を分節し、人間的スケール感をもつ空間がデザインされていたと述べている。しかし、広見の本来の設置目的や、名称の語源などについて歴史的資料をもとに論述している文献はみられない。

また、広見の構造について、島村⁴⁾は、現存する主な

*keyword: 広見、近世城下町、金沢絵図

**正会員 博士(学術) 金沢学院大学美術文化学部文化財学科(920-1392 石川県金沢市末町10)

広見の形態を調べタイプ分けを行っている。竹田他¹⁾は、藩末期の街路構造の分析で、広見数と単位長当たり広見数について道路種別、居住地別に集計している。

(2) 近世城下町の道路計画

個々の道路の空間的構造に関する研究は少ないが、西川⁵⁾は、城下町の城郭と城下の関連について戦国大名の都市政策のなかで捉えている。また、彦根を例に、道路の屈曲が戦略的な計画として行われていたと解釈している。内藤⁶⁾は町の風景を論じるにあたり、城下町の構造について通りの長さや幅員について述べ、江戸の明暦の大火以降、防火のため要所に空地を設けることが全国的に一般的になったが、5~10間程度で「広小路」と呼ばれたことから当時の道路幅員が狭かったことを示している。また、矢守⁷⁾も金沢を含む複数の城下町について主要街路の幅員を調べており、大火後に道路拡幅が行われたと述べている。

以上のように、近世城下町は、戦国大名たちが山城から平城・平山城に城を構えるようになるとともに、防衛戦略的視点から堀や道路を計画したといえる。さらに、武士や町人が城下に集住することにより、戦略的目的から屈曲道路や枡形とともに、広見的部分が造られた可能性が考えられる。また、その後は防火目的のために、広小路(広見的部分)が計画されていたといえる。

(3) 金沢城下町の都市計画の経緯

金沢城は、金沢坊に1580年佐久間盛政が、1583年前田利家が入城した。浅香⁸⁾によれば、小立野台地先端に位置する平山城であり、犀川・浅野川、小立野台地に囲まれた地点とはいえ、周囲の山から城を俯瞰でき、決して堅固とはいえない位置であった。そのため、地形上の

欠点を補うべく防衛戦略的な都市計画を行ったといえる。

金沢城下町の都市計画に関して文献⁹⁾によると、慶長期はまだ徳川政権が安定する前で戦が続いた時期であり、金沢城を囲む内・外惣構堀が造られることにより、城防衛を目的とした城下町の基本的形態ができた時期といえる。その後、元和期には町割を行い、これまで城内にあった家臣屋敷を城外に配置する。また、真宗以外の寺社地を城外下縁部へ移し、城の守りをより堅固なものとした。また、その後の2度の大火により辰巳用水の建設と町割を行い、内惣構の有力町人が北国街道沿いなどに配置された。さらに、万治期には小松の家臣が金沢に戻り、再び侍屋敷割を行った。田中¹⁰⁾は「元和・寛永期の都市プラン」の用水や寺院・侍屋敷、町人地の配置について調べており、また、高澤¹¹⁾は「寛永12(1635)年大火後の町割が後まで維持された」、「17世紀後期には町域は約85%まで達成されていた」としている。以上から、近世城下町は寛永期(1630年代)に居住階級別の町割がほぼ完成し、さらに万治期(1660年頃)に侍屋敷地を増加させたといえる。

一方、道路計画について、田中¹²⁾は金沢について、「屈曲の多い道路は城下町の特徴」とし、「敵が侵入した際、城下や城濠の遠見や見透しがきかないよう」「稲妻型・T字型・鍵型・釣型路・袋小路を工夫すると共に道路の幅を極端に狭め屈曲した」とある。また、大火後の「近世的都市計画に基づいた軍事的要求」から「道路の幅・屈曲・袋小路などが適当に配置されたほか、道路の要所要所に枡形が置かれた」と述べており、戦略的計画として

狭幅員道路や屈曲を設けたと解釈している。また、「広見」の記述はないが、戦略としての枡形や橋詰・橋番所の記述があり、広見的部分の戦略的目的を示している。

3. 広見の配置に関する分析

(1) 調査の方法

ここでは金沢城下町形成期の絵図をもとに、広見の位置や形状を分析することにより、その配置特性について考察する。取り扱う資料は、古絵図を写真撮影しデジタル化した絵図¹³⁾の中で、現存最古の『金沢図』(1667)である。これは、800ピクセル四方の画像ファイルに分割して収録されており、501×560cmの金沢図を5700×6200ピクセルで表している。文献¹⁴⁾の四定点測定値から原図の平均縮尺を1/695と算出し、デジタル地図の縮尺を、1ピクセル62cmとした。以後の分析では、面積の算出にこの縮尺を用いている。

方法は、まず対象道路が隣接道路と同じ幅員で連結されていると仮定したときの道路や交差点を「原形道路」とし、それより広がっている部分を「広見」と定義して抽出した。判別可能な広見は101箇所であった。その

位置を図1に示す。

ただし、縮尺や絵図の精度の関係上、当時の広見をすべて抽出できたとはいえない。

(2) 広見の形態

広見の大きさについて(表1)、広見部分の面積を概算した結果、50~100㎡が最も多く、全体の約2/3が300㎡以下であるが、1000㎡以上も9%あり、全体の平均は402㎡であった。ただし、絵図から求めた面積であり、相対的な大小関係の参考値として扱うこととし、以後の分析では、100㎡以下を「小」、~300㎡を「中」、~1000㎡を「大」、1000㎡以上を「特大」の4段階に分類した。また、広見面積を原形道路面積で除した拡張

表1 広見の形態特性

面積	数	%
0~50㎡	8	7.9
50~100	22	21.8
100~150	10	9.9
150~200	11	10.9
200~300	15	14.9
300~500	10	9.9
500~700	7	6.9
700~1000	9	8.9
1000~2000	5	5.0
2000~3000	4	4.0
計	101	100.0

広見の拡張比		
1.00~1.25	27	26.7
1.25~1.50	25	24.8
1.50~1.75	29	28.7
1.75~2.00	8	7.9
2.00~2.50	9	8.9
2.50~3.00	1	1.0
3.00以上	2	2.0
計	101	100.0

形状		
合成	4	4.0
角状	50	49.5
斜線	47	46.5
計	101	100.0

形成タイプ		
集合	37	36.6
膨らみ	64	63.4
計	101	100.0

接続道路方向数		
1	3	3.0
2	26	25.7
3	40	39.6
4	26	25.7
5	4	4.0
6	2	2.0
計	101	100.0

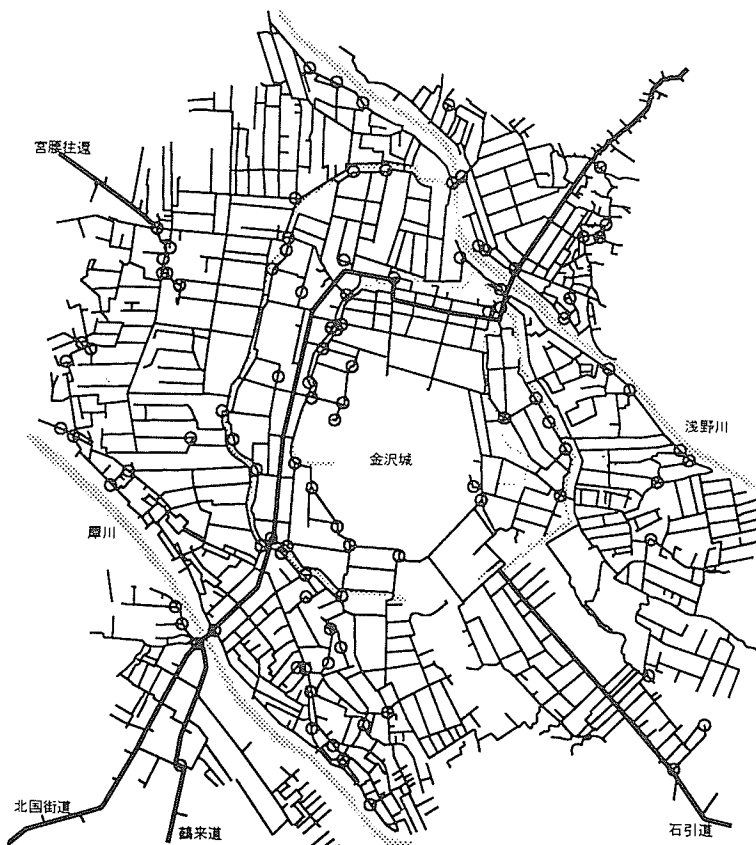


図1 金沢図による道路網と広見の位置(作成:著者)

比をみると、1.5 以下で半数を占めるが、2 倍以上に拡張しているものも12%あった。平均拡張比は1.6である。

広見形状は、方形のように急な広がりがあるものを「角状」、徐々に広がっているものを「斜線」、両方もつものを「合成」とした。形成タイプは、文献⁴⁾を参考に、T字路の組み合わせなど複数の交差点を包含した「集合」型、1箇所で行き交わる交差点や道路の一部が膨らんだ「膨らみ」型に分類した。広見数は膨らみ型の方が多い。接続道路方向数は、広見から発する道路方向数を調べた。たとえば、袋小路先端部の広見の場合、方向数は「1」、直線道路上などは「2」、三叉路は「3」となる。「3」が最も多く、「4」でもT字路など複数の交差点の組み合わせもあることから、城下の道路に屈曲、鍵型、稲妻型、T字路が多いことがわかる。

広見の形成タイプについて、表2は大きさとの関係を示している。「小」では膨らみ型、「中」～「特大」では集合型の割合が高く、平均値でも集合型の広見の方が大きい。しかし、拡張比は膨らみ型の方が大きい。形状との関係では分布にあまり差はみられなかった。また、表3の接続道路方向数との関係では、集合型は「4」が最も多い。十字路上の広見は膨らみ型としており、この場合は十字路ではなく、T字路やL字路等が組み合わせられた広見である。膨らみ型は「3」、「2」が多い。相対的に集合型は方向数が多く、膨らみ型は少ない。

(3) 広見の配置特性 (表4)

広見の位置については、城郭からの距離を示す指標として、内・外惣構堀（以後「内堀」、「外堀」）、2河川に対して城郭側（内側）か否（外側）かを調べた。城郭の防衛線である外堀より外側で61%と、約6割が城下周縁部に位置することになる。水路との隣接についてみると（重複集計）、全広見数の71%が何らかの水路に接していることになる。防衛上重要な内・外堀と2河川で半数近くを占める。

次に道路種別の広見数について、城の周囲を囲む道路と、城外からの進入路である四街道について調べた。中心部を通らない石引道、宮腰往還、鶴来道では広見は1箇所ずつしかない。しかし、図1でみるように宮腰往還の城下への入口部（宮腰口）に小さな広見が集中している。城周囲と北国街道にはそれぞれ10箇所、7箇所あ

る。北国街道の広見の位置は、すべて内・外堀と2河川に架かる橋に接続している。以上より、城から外部へ放射状に延びる重要な直線道路には、要所以外に広見はなく城を囲むその他の道路に配置されていることがわかる。沿道土地利用では（重複集計）、

表2 広見の大きさと形成タイプ

	小	中	大	特大	平均	拡張比
集合 (%)	8 21.6	14 37.8	11 29.7	4 10.9	458m ²	1.47
膨らみ (%)	22 34.4	22 34.4	15 23.4	5 7.8	369m ²	1.60

表3 広見の形成タイプと接続道路方向数

	1	2	3	4	5	6
集合 (%)			10 27.0	21 56.8	4 10.8	2 5.4
膨らみ (%)	3 4.7	26 40.6	30 46.9	5 7.8		

橋に直結する広見が30%を占めており、橋詰め番所、桁形等が設けられていたと考えられる。また、武家地に接する割合が最も高く、次いで町人地、城・藩用地となっている。城下に武家地の占める割合が高いため、広見の特性の差異とはいいい難い。

広見の位置と大きさの関係（表5）は、城郭から外側へ行くほど小さい広見が多く、平均面積も小さい。しかし、拡張比は外側ほど大きい。表6は水路と隣接した広見の位置をみたものである。内堀に接する広見は、内堀の内側と外側はほぼ同数だが、外堀に接する広見は外堀内側に多く配置されている。また、浅野川に接する広見も城郭側の方が多い。また、「隣接%」として、水路と隣接する広見数の全広見数に対する割合を示しているが、内堀の内側に接する割合が50%である一方、外堀内側から両川外側へと外周部ほど水路に接する割合は低くなる。内堀内側で接する割合が低いのは、城郭周囲の道路に広見が多いことによる。

主な水路に隣接している広見の形態について橋の有無別にみると（表7）、橋に接続している広見に角状、集合型が多く、接続していない広

表5 広見の位置による大きさの分布

	小	中	大	特大	平均	拡張比
内堀内 (%)	1 8.3	2 16.7	7 58.3	2 16.7	729m ²	1.44
外堀内 (%)	3 11.2	13 48.1	7 25.9	4 14.8	509m ²	1.50
外堀外 (%)	18 38.3	18 38.3	8 17.0	3 6.4	300m ²	1.57
両川外 (%)	8 53.3	3 20.0	4 26.7		265m ²	1.70

表6 水路と隣接した広見の位置(重複集計)

	内堀	外堀	浅野川	犀川	他水路	広見数	隣接%	全体
内堀内	6					6	50.0	12
外堀内	5	12	3		4	22	81.5	27
外堀外		6	6	1	22	34	72.3	47
両川外			5	2	5	10	66.7	15
計	11	18	14	3	31	72	71.3	101

表7 主な水路に隣接している広見と橋の有無

	形状			タイプ	
	合成	角状	斜線	集合	膨らみ
橋と接続 (%)		11 61.1	7 38.9	12 66.7	6 33.3
接続なし (%)	2 7.2	9 32.1	17 60.7	9 32.1	19 67.9

表4 広見の配置特性

位置	数	%
内堀内	12	11.9
外堀内	27	26.7
外堀外	47	46.5
両川外	15	14.9
計	101	100.0
水路との隣接(重複集計)		
内堀	11	10.9
外堀	18	17.8
浅野川	14	13.9
犀川	3	3.0
他水路	31	30.7
計	77	
(広見数)	72	71.3
道路種類		
城周囲	10	9.9
北国街道	7	6.9
石引道	1	1.0
宮腰往還	1	1.0
鶴来道	1	1.0
計	20	19.8
沿道土地利用(重複集計)		
橋	30	29.7
城・藩用地	12	11.9
武家地	75	74.3
町人地	48	47.5
寺社地	9	8.9
その他	6	5.9
計	180	178.2

見では斜線、膨らみ型が多い。表8 道路種別の広見の形態

橋詰の広見は、橋に集中する道路上に柵形として配置されたものが多いと考えられる。橋のない広見で斜線が多いのは、水路が湾曲しているため

	大きさ					平均	形状			タイプ	
	小	中	大	特大	平均		合成	角状	斜線	集合	膨らみ
主要道路 (%)	1	2	10	7	1010m ²	1	12	7	10	10	
	5.0	10.0	50.0	35.0		5.0	60.0	35.0	50.0	50.0	
他道路 (%)	29	34	16	2	252m ²	3	38	40	27	54	
	35.8	41.9	19.8	2.5		3.7	46.9	49.4	33.3	66.7	

直線敷地との間に位置する道路が斜線状に拡張した結果と考えられる。また、表8は道路種別の広見の形態であるが、明らかに主要道路に大きな広見が多く、他の

表9 沿道土地利用からみた広見の大きさ

	小	中	大	特大	平均
橋 (%)	11	9	8	2	345m ²
	36.6	30.0	26.7	6.7	
城・藩用地 (%)	1	3	5	3	737m ²
	8.3	25.0	41.7	25.0	
武家地 (%)	20	29	18	8	418m ²
	26.7	38.6	24.0	10.7	
町人地 (%)	16	20	9	3	347m ²
	33.3	41.6	18.8	6.3	
寺社地 (%)	5		3	1	426m ²
	55.6		33.3	11.1	

道路に比べて角状の広見、集合型の広見の割合が高い。交差点を結合させ急な広がりをもたせた大きな広見ほど意図的に配置した可能性が高く、防衛戦略的な計画がうかがえる。沿道土地利用からみた広見の大きさ（表9）では、大きい広見の割合は城・藩用地で最も高く、次いで寺社地、また、小さい広見の割合が最も高いのも寺社地である。同様に、広見の形状、形成タイプでは（表10）、城・藩用地、寺社地で角状の割合が高く、膨らみ型が多い。一方、橋に接続する広見は角状、集合型が多い。

4. まとめ

本研究では、金沢に現代も多く残る広見について、形成時期の配置目的や特徴を分析・考察した。始めに、既存文献をもとに近世城下町の成立過程を調べ、城下町の防衛・防火を目的とした道路計画のひとつである橋詰、柵形、広小路が広見と同様のものと位置付けた。次に、金沢城下町がほぼ完成した時期を17世紀後期とみなし、その時期に最も近い絵図をもとに、広見の形態と配置の特徴を分析した。分析で得られた主な結果を以下に示す。

- ① 広見の形成タイプは、6割以上が交差点や道路部の膨らみ型で、接続道路数が少なく直線道路上やL字型、三叉路の交差点部分の広見が多い。
- ② 集合型は4割近くを占め、接続道路が多く、複数の交差点が組み合わされて形成された広見である。
- ③ 広見の位置は、外堀より外側で全体の6割を占める。
- ④ 橋詰など川の外側の一部の広見以外は、中心部の城郭から遠いほど小さい広見が多い。
- ⑤ 広見の約7割が水路と接しており、特に戦略上重要な堀・川の内側（城郭側）に多く位置する。
- ⑥ 広見の3割が橋に接続しており角状・集合型が多い。
- ⑦ 主要道路では、城を囲む道路に広見全体の1割、街道に1割あり、他の道路上の広見より大きく、角状・集合型が多い。

以上の特徴について主に戦略的な計画からみると、屈曲やT字路が多い道路網の中で、要所ごとに意図的に広

表10 沿道土地利用からみた広見の形状・タイプ

	形状			タイプ	
	合成	角状	斜線	集合	膨らみ
橋 (%)		17	13	19	11
		56.7	43.3	63.3	36.7
城・藩用地 (%)		9	3	3	9
		75.0	25.0	25.0	75.0
武家地 (%)	4	34	37	22	53
	5.4	45.3	49.3	29.3	70.7
町人地 (%)	1	24	23	23	25
	2.1	50.0	47.9	47.9	52.1
寺社地 (%)		7	2	4	5
		77.8	22.2	44.4	55.6

見を配置したと考えられる。特に、主要街道と重要な水路との結節点には橋番所を置くとともに部分的に大きく道路を広げ、城郭近辺の道路と同様、危急の対応が可能なように計画されたと考えられる。今後、現代に至るまでの広見の位置や使われ方の変化を調べることにより、広見の有効な活用方法が計画できると思われる。

<参考文献>

- 1) 竹田、川上：「藩末期における金沢城下の街路構造」、土木市研究、第13号、pp.81-91、1993.6
- 2) 島村昇、『金沢の家並—近代文学にみる原風景』、鹿島出版会、pp.224-228、1989.7
- 3) 佐藤滋、『城下町の近代都市づくり』、鹿島出版会、p.10、p.12、1995.8
- 4) 日本建築学会大会都市計画部門研究協議会資料作成委員会、『町並み・住環境の都市計画—金沢の歴史的文脈から—』、能登印刷、p.52、1983.9
- 5) 西川幸治、『日本都市史研究』、日本放送出版協会、1972.9
- 6) 内藤昌、『日本 町の風景学』、草思社、pp.103-112、2001.5
- 7) 矢守一彦、『都市プランの研究』、大明堂、pp.322-327、1993.10
- 8) 喜内敏編、『日本城郭史研究叢書第5巻 金沢城と前田氏領内の諸城』、名著出版、pp.3-27、1985.3
- 9) 高澤裕一他、『県史17 石川県の歴史』、山川出版社、pp.154-192、年表pp.12-14、2000.2
- 10) 田中喜男、『加賀藩における都市の研究』、文一総合出版、pp.40-78、1980
- 11) 文献8)、p.60、p.71
- 12) 田中喜男、『城下町金沢』、日本書院、pp.9-32、1966.2
- 13) 『古絵図探訪』能登印刷、2002
- 14) 金沢市史編纂委員会、『金沢市史資料編 18 絵図・地図』、金沢市、pp.67-71、pp.75-76、1999.3